

## 海外シリーズ②①

### ヨーロッパ10万キロ

小澤 喜久夫

オランダは知ってるつもりでよく知らない不思議な国である。小さな国であるが、フィリップスやハイネッケン、ユニリーバ（ニッポンリーバの親会社）、アクゾなど世界的な大企業を有し、自らの国土を守るためとはいえ土木技術は世界屈指である。中世・近代に目を転じてもスペインやイギリスと東南アジア、インド、極東の覇権を争っている。そんなオランダに約2年間滞在した。

#### オランダ語

オランダ人はオランダ語を喋っている。ご存じであろうか？ユニリーバは世界中に500社、従業員30万人を数えるが、オランダの研究所では当たり前の話であるが圧倒的にオランダ人が多く日常会話は仕事を含めてオランダ語である。オランダ人はほとんど全員英語を使えるが（それも日本人一般のレベルから比べたら恐ろしく上手である）、それでも普段はオランダ語を使いたがる。これが大問題であった。オランダ語はドイツ語によく似た言葉である。よってドイツ人はすぐにオランダ語を習得する。ユニリーバはロイヤル・ダッチ・シェルと同じ英蘭系企業であり、従ってイギリス人も多い。イギリス人というのは日本人と同じで少数の例外を除いて英語以外喋れない輩だと思っていたら、これがとんでもない間違いで2週間の

即習コースから帰ってくると片言ながら喋るのである。フランス人ばかり。あのアメリカ人ばかり。オランダ人は学校教育の成果もあり、皆母国語に加え英語、フランス語、くらいは解する。想像しなかった。しかし考えてみればちょこっと行けば国境を越えてしまうのがヨーロッパ。イタリア語が習いたければ、簡単にネイティブの先生が見付かるし、実践が必要なら東京から大阪に行く感覚でイタリアに長期滞在すれば良い。NHKのイタリア語講座を見なくては勉強する機会を簡単には作れない日本とはどだいヨーロッパ言語に対するインフラストラクチャが違うのだと言う事に気付く。結局私は2年間英語を主に話し続け、オランダ語の方は努力はすれど上達せずで帰国してしまった。

#### 勤労意識

オランダ人の昼休みは30分である。もちろん1時間取っても構わないし、中には1時間の昼休みを取る人も居る。しかし大体の人は余分に昼休みを取る位ならその分早く家に帰りたと思っている。これは夫婦・家族が出来るだけ長く一緒に居ると言う欧米の習慣に加えて庭の手入れをすることが大きな理由になっている。この辺の意識は日本人には仲々理解し難い。オランダの雇用契約は日本とは幾分異なっており、1週間に何時間働くと言う形で取り交わされる。通常は週に40時間労働の契約であり、残業代は支給されない。ユニリーバ研究所の場合はフレックスで、7～9時に出社、16時以降の退社で、週の労働時間が40時間に達していれば構わないというシステムであった。ただ

---

ニッポンリーバB. V. 業務用品事業本部

1993年2月－1995年2月 Unilever Reserch Laboratory Vlaardingen 主任研究員

昭和57年応用化学科卒業・新制32回

昭和62年大学院博士後期課程修了・工学博士

し残業は1日につき0.8時間、累計で10時間までしか認められない。最もそんなに残業する人はあまり居ない。ボーナスなどと言ったものは当然無く年俸制である。所得税は収入に応じて3段階設定されており、非常に高く最低35%、最高60%位である。これに一般消費税(17.5%)が加算される。ただし低所得者への保護措置は充実しており、医療費は全額免除、学費も収入に応じて負担分が決まっている。最もこれが最近では社会問題化しつつある。オランダを含めてヨーロッパの平均賃上げ率は約2%であるが東西の壁崩壊後、種々の理由からこの賃上げ率を維持するのが難しくなりつつあり、また老人人口の増加、移民の流入による低所得者層の増加などにより増税か社会福祉の軽減かと言った議論を引き起こしている。勤労意識を考えると日本と非常に異なるのが、仕事とプライベートとの間の明確な線引きである。会社は会社であり、1日8時間労働という契約を満たせば良い、会社にとってどんなに重要な仕事であろうとそのために自分が9時間働く必要も義務も無い、と言うのが一般的な勤労意識である。日本では帰りにちょっと一杯と言う事は日常茶飯事に起こるのであるが、オランダでは決して起こらない。何故なら会社の同僚はプライベートの友達ではないからである。もちろん同僚が友達である場合もあるが、その場合には帰りにダッチ・カフェ(オランダ風パブ)で一杯飲むのではなく家族ぐるみで互いの家に夕食の招待をするのである。

## 休暇

オランダ人にとって休暇は重要である。夏休みが大体3~6週間、冬休みが1~4週間で、毎年7~8週間の有給休暇を消化する。夏休みを長く取るか冬休みを長く取るかは個人の自由であるが一般的には夏休みの方が長い。私のセクションの秘書はスキーをこよなく愛し、冬はスイス、イタリアへ2週間のスキー旅行に3回位出掛けていた。夏期休暇は通常6月から9月の間に各人の都合により勝手に取得される。休暇の計画は半年以上前から計画され、またこの計画を立てること自体が

彼等にとって大きな楽しみであるらしい。ヨーロッパ中に設備の整ったキャンプ場がある。いわくシャワー室、スーパーマーケット、プール、ディスコなどなど。このオートキャンプを見ているとヨーロッパの国々によって違いがあり面白い。オランダ人は小さいキャラバンを比較的小さい車で引いていくが、フランス人、ドイツ人は大きなキャラバンを大きな車(例えばベンツのSクラス)で引いていく。オランダ人は土地の物を食するが、ドイツ人はドイツから食料を山の様に持参する、等々。いずれにしる彼等は家族で休暇を過ごす。これは日本と非常に異なる点である。日本では子供達が中学生くらいになるとあまり両親と一緒に遊ばない。オランダでは20才位まで子供は休暇を両親と一緒に過ごすのである。もちろん経済的な理由もあるだろうが、前項で書いたように家族で過ごす時間が常日頃から長くお互いの理解が十分な点が大きな要因であろう。我々もオランダ人に習い休暇を満喫した。標題の10万キロというのは2年間で私が車を運転した距離である。オランダ滞在中に我々夫婦は日本で有名な観光地には出来るだけ行かないと言う取決めをした。もちろんベルリンとか白鳥城などにも行ったが、大体はヨーロッパに住んでいなくては行けない様な、辺鄙かつ交通の便の悪い土地を尋ねた。そんな自動車旅行を繰り返す内に色々な国の人と様々な話を交わす事が出来るようになり、ヨーロッパに蓄えられた富の大きさ(それが略奪によるものか自分達で創造したものかは別にして)を実感したり、宗教と芸術、日常生活の関わりが少し理解出来たように思えた。福祉に関しても非常に大きな経験をしたが残念ながらスペースが足りない。

結婚して2週間後に夫婦共オランダに引っ越してから怒濤の様に過ぎた2年間の思い出を雑多に書いてみました。機会があればまたユニリーバに転勤し次の10万キロをと考えています。